Book Review 15-21 時代小説　#陽炎の門

『#陽炎の門』（葉室麟著）を読んでみた。著者は歴史文学賞、 松本清張賞、直木三十五賞、 司馬遼太郎賞を受賞。作品には『銀漢の賦』、『蜩ノ記』、『散り椿』、『螢草』等がある。

本書を一言で述べると、横暴で傍若無人な藩主に対する胸のすくような復讐劇である。

豊後黒島藩の下士上がりで執政に昇り詰めた桐谷主水。藩主を落書で諫言したとして罪を擦り付けられた親友を自らの手で介錯した過去を持つ。今はその己の手で介錯した親友の娘を上司の斡旋により三十半ばにして娶っている。そんな中、故郷を離れていた息子が父親の仇討ちに現れて窮地に陥る。執政となり初登城した日から、忌まわしい事件が蒸し返され、人生は暗転する。10 年前、派閥抗争で親友を裏切ったとされる事件が事の発端だった。

事件の鍵となる不可解な落書は誰が書いたのか。若いときの二派に分かれて戦った河原での争いに、現藩主の若き日の醜い陰謀が隠されていた。主水はこの危機をどのようにして乗り切るのか。

現在の事例だと、部下に傍若無人な行動（「20 メートル歩かされたことに激怒した」、エレベーターの「ボタンも押せないのか」と職員を怒鳴りつけた、等々）を繰り返した兵庫県知事＃斎藤元彦氏に死をもって異を唱えた元県西播磨県民局長の告発文を公表した話。
または、森友学園への国有地売却をめぐる財務省の公文書改ざん問題で、改ざんを強いられ、自死した近畿財務局職員の＃赤木俊夫氏の無念を、夫人が同省理財局長だった＃佐川宣寿氏を告訴したような話である。

弱きものがその時代の最高権力者に盾突く話は荒唐無稽にも思えるが、その時代に実際にあった事例を考証して、読者の胸を熱くしている。こんな話をもっと読みたい。